

鏡餅とミカン

鏡餅は、新年にその年の幸福を願う年神様の居場所としてお供えするものです。

昔から米は神様の恵みに感謝するものとして、あらゆる行事で米をつき餅にして神様に供えてきました。鏡餅に「鏡」とつくのは、鏡は神様の宿るご神体として神社などでまつられており、丸い形をしているため、それに似せて丸い餅を作ったからといわれています。

鏡餅の一番上にみかんと飾る家もあります。正式にはみかんではなく、「だいたい(橙)」というみかんの一種を飾ります。だいたいは「代々」に通じ、果実は冬に熟しても落ちにくいいため数年残ることがあり、1本の木に何代もの実がなることから、家が代々繁栄するようになるといって願いを表しています。みかんよりオレンジ色が濃く、味は酸味が強いいためそのままは食べづらく、香りや酸味を活かしてポン酢などに活用されています。また、木になっている様子に似せるため葉つきのものを飾る風習があります。

お正月は、鏡餅とだいたい、また喜びが来ると言われる「柿||喜来」を飾ってみましょう。

